

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



ジョヴァンニ・アントニオ・カナル（通称カナレット）（二六九七—一七六八）
《ランタンのあるポルティコ》
一七四四年頃

紙、エッチング

二九・七×四二・八cm

ヴェドゥータ（景観画）と呼ばれる風景画のジャンルがある。これは、都市の眺め等を精密な透視図法で描き出す絵画で、イタリアの名所を描いた作品は、アルプス以北の貴族たちに大歓迎された。本作品の作者カナレットは、その代表的な画家である。ここに描かれた情景には、ランタンの吊り下がった柱廊（ポルティコ）越しに、彼の故郷であり主な活動地である、ヴェネツィアの建物（煙突に特徴あり）や、遠くに海の景色も見える。画面から漂う詩情故に、ついすんなりと見入ってしまうのであるが、実はこれ、現実の眺めではない。ヴェネツィアには、凱旋門などの古代ローマの建築物は無いのである。眼を驚かせる写実表現と、鮮やかな綺想とが織り成すヴェドゥータの世界、いずれ展覧会でもご覧頂きたいと考えている。乞うご期待。

（上席学芸員 新田建史）

No.
150
2023年度 | 夏 |

『アマリリス』 創刊号を読む

館長 木下直之

「園地に遊びに来る子供達の10%でも美術館に入るようにしたいし、小便をするため、手洗いを使うために入館してもかまわないから、子供が使用するには立派すぎで一瞬、排便できないようなものを作って欲しい。濟ませてほっと安心して出て来たら、そこにすばらしい絵や彫刻があつて、それによつて子供達の人生が変わつたものになる。そんな夢をもつて設計して欲しい」

一度読んだら忘れがたい発言ゆえに、鈴木敬初代館長が『アマリリス』創刊号に寄せた「静岡県立美術館―出発にあつて」の、自ら「」でくくつた肉声と思しき部分を書き出してみました。

子どもたちを迎え入れたいという、当館が開館した一九八六年当時の「夢」を期待する美術館像が語られていてとても興味深いのですが、それを伝えるのに、よりよつて「小便」だとか「排便」だとかを持ち出すだなんて、「小

便小僧」の歴史を追いかけ（たとえば拙稿「なごやかな町／小便小僧たちのその後」『わたしの城下町』所収）、二号前の本誌に「鴻池朋子展後日談と糞尿譚」（ここではクソ、ウンコ、ウンチを連発、さらに芳賀徹前館長の「江戸の花咲男―源内をめぐる比較放屁論」『文明としての徳川日本』所収にまで言及）を寄せたばかりの私にとつて、五代前の鈴木敬館長は他人のような気がしないのです。知識も教養も月とスッポンの私ではありますが、強い紐帯を感じてしまうのです。

それにしても、「人生が変わつたものになる」とは忘れられない言葉です。大きくではなく、小さくも含めれば、人生を変えてしまうものは世の中にいくらかもあるはず。そのひとつとして、美術館はいつもそうありたいですね。むしろ、そのために美術館はあると言つても過言ではない。

実際、我が身を振り返つても、高校生だった私が、初めて自ら思い立って、

浜松から名古屋まで電車に乗って（金がないので新幹線ではなく東海道線で）、訪れた美術館は愛知県文化会館（愛知県美術館の前身）のパウル・クレー展でした。その時の絵や会場風景は忘れてしまつても、展覧会ポスターは今も鮮やかに浮かんで来ます。その時は気づかなくとも、疑いなく小さな転機・方向転換だったはずです。

さて、めでたく一五〇号を迎えた本誌の創刊号がどのようなものであったかを紹介しましょう（六〇号以降のバックナンバーは当館ウェブサイトで公開中）。これに先立って『静岡県立美術館準備室ニュース』が二号出され（一九八四年七月一日、八五年九月一日）、八六年春発行の創刊号は初めて「アマリリス」を名乗りました。それはトニー・スミスの屋外彫刻「アマリリス」にちなんだ命名でした。「このモニュメントは、新しい県立美術館の未来を志向する清新なフォルムをもつています」と編集後記が語り、館の全景とと

もに写した写真が表紙を飾っています。判型はB5、文章は横書きであることが現状と大きく異なります。

見出しだけを書き出してみます。「開館記念展ひらかれる―東西の風景画―」メトロポリタン美術館特別出品―国宝・重文39点も出品、「開館記念展第2部」館蔵名作展―風景との出会い、「展示作品より」（見開き二頁に主な作品図版掲載）、「彫刻プロムナード完成する―美術館前の散歩道」、「美術館ボランティア―県民と館の架け橋に」、「静岡県立美術館―出発にあつて」（館長署名記事、なぜか巻頭ではない）、「美術館友の会募集はじまる」、「出版案内」、「行事案内」、「利用案内」、「編集後記」。

このうち特筆すべきは、一九八六年の時点ですでに「美術館ボランティア」という言葉が使われていることです。私自身も兵庫県立近代美術館勤務時代に遭遇した阪神淡路大震災の起こつた年が「ボランティア元年」といわれたことを思い起こせば（それは一九九五年のこと）、先駆的な試みでした。同時に友の会も誕生し、両者は三七年を経た今も活動を続けています。これまた、「人生が変わつたものになる」との明らかな証でしょう。



右から『準備室ニュース』第一号、『アマリリス』創刊号、六五号、一〇九号。

『アマリリス』変遷史

上席学芸員 貴家 映子

ソカロ、ヒル・ウインド、エスプラ
ナード、コリダール、たいせつな風景
…。

これらの言葉の羅列が何を意味する
のか、すぐに分かった方は、なかなか
の美術館通とお見受けします。いずれ
も美術館が発行している広報誌の名称
で、各館を象徴する言葉が選ばれてい
るようです。今回、当館の広報誌『ア

マリリス』が一五〇号の節目を迎える
にあたり、その変遷を振り返ってみた
と思います。

まず、開館まで二年を切った一九八
四年七月には、アマリリスの前身であ
る『準備室ニュース』第一号が、翌八
五年九月には、第二号が発行されまし
た。一九八六年春、いよいよ創刊した
『アマリリス』は、開館記念展『東西
の風景』を特集。展覧会の紹介は、そ
の後も長期休館時をのぞいて主要記事
となり、第二号から始まった表紙収蔵
品解説、年四回の刊行ペースとともに
三七年間続いています。

学芸員の日々の研究成果を報告する
「研究ノート」は、一九八七年夏の第
五号で初めて登場しました。一九八六
年夏の第二号に早くも登場した「エッ
セイ」と併存している号もありますが、
やがて「研究ノート」に一本化され、
今に続きます。二〇〇三年秋、第七一
号から始まった「本の窓」は、学芸員
の関心事やキャラクターがダイレクト

に感じられるコーナーではないでしょ
うか。

二〇〇二年春の第六五号では、サイ
ズがB5からA4へと拡大しました。
大きく体裁が変わったのは、二〇一三
年春の一〇九号。芳賀徹前館長の提案
で、縦方向へと文字組みが変更され、
以来十年、同じフォーマットで刊行さ
れ続けています。木下直之現館長の就
任以降は、館長コラムがレギュラー化
しました。

新しい体裁になってからは、外部の
執筆者に原稿を依頼する機会も増えて
います。研究者、アーティスト、他館
の学芸員、そして、様々な分野の大学
教員など、多岐にわたる執筆陣を見る
につけ、当館がいかに多くの方々の
連携や協力によって、事業を実現して
きたかが分かります。

もの言わぬ資料や作品を扱う学芸員
にとつて、書くことはとても重要な仕
事です。一方で「メール、仕様書、SN
Sの投稿しか文章を書いていない！」

という日が続いてしまうことも。その
なかで、本誌の執筆は、準備中の企画
や終了した事業、収蔵品などについて、
少し立ち止まって考える機会となりま
す。予算が減り、図録の発行も難しく
なりつつある近年では、職員が日々と
のような考えで業務に当たっているか
を発信し、その時々々のチャレンジを記
録するための貴重な媒体ともなってい
るでしょう。

現在の発行部数は、千八百〜二千部
です。ウェブサイトで公開はしている
ものの、館内外での不特定多数への配
布は行っておらず、友の会会員の皆さ
ま、全国の美術館やギャラリー、研究
者、作品をご寄贈、ご寄託いただいた
方々のお手元に、直接、お届けしてい
ます。美術館を支えてくださっている
皆様に応援していただけるような情報
発信を、これからも心掛けたいと思
います。

1 順に、埼玉県立近代美術館、三重県立
美術館、福岡市美術館、横須賀美術館、
神奈川県立近代美術館が発行する広報誌
の名称。

2 タイトルの由来は、右ページに記載の
通り。名付け親は、『準備室ニュース』
から編集を担当していた山下善也氏（本
誌一一二号より）。

糸で描く物語 刺繍と、絵と、ファッションと。

2023年7月25日(火)～9月18日(月・祝)

りの中で、各地域の文化・習俗をご紹介できることとなりました。

第一章でご紹介する東欧の民俗衣装は、地域ごとに異なるルーツと言語を持つ人々が、それぞれの文化を背景とした独自の文様や技法の刺繍によって彩ってきたものです。ルーマニア中部のカロタセグ地方では、ハンガリー系の人々が、太い線による、力強さ、素朴さの特徴とする刺繍「イーラーシヨシユ」を生み出しました。一方、同地方のザクセン系の人々は、クロスステッチを中心に、整然とした印象の刺繍を手がけています。スロヴァキアの衣装や装飾品からは、華やかさと技巧性に富んだ多様な刺繍が、地域ごとに生み出されたことをご覧いただけるでしょう。

第二章で焦点を当てるカナダ極北地域のイヌイットたちの壁掛けは、二〇世紀半ば以降、定住化が進んだ彼らの経済的自立を支援するために奨励された、芸術活動を通して作られるようになったものです。狩猟生活や、神話をはじめとする独自の伝承など、イヌイット固有の文化に根差したイメージが、大胆な色彩と、ときにユーモラスな造形感覚で表現されています。それは、つくり手の自由な表現であると同時に、彼らの世界を豊かに語り継ぐ、



図1 《カロタセグ地方ハンガリー人スカーフ》(部分) 20世紀半ば
谷崎聖子、シエレス・バーリント蔵

貴重なテキストとも言えます。

第三章には、近現代のアーティストによる、様々な糸の表現を取り揃えました。

チェコからは、一九五〇年代の厳しい社会体制下で、刺繍によって生きる力を取り戻したエヴァ・ブラーズドヴァー、手作業の痕跡を強く感じさせる素朴さと即興性が特徴の絵本作家エヴァ・ヴォルフオヴァーが登場します。

日本からは、大塚あや子、樹田紅陽、蝸牛あや、小林モーション、そして貝戸哲弥ら、それぞれにルーツの異なる刺繍技法を学び、現代の表現へと活かしながら制作を行うアーティストたちの作品をご紹介します。

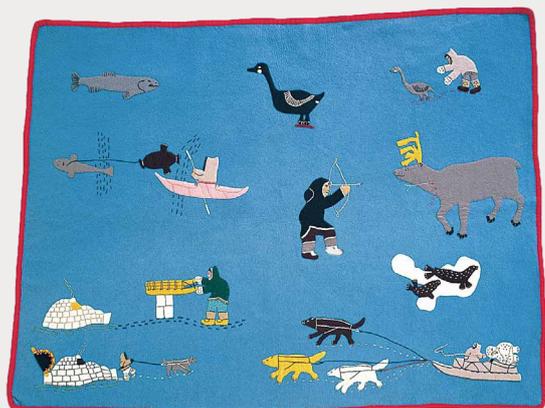


図2 《ダブル製壁掛け〈夏の生活、冬の生活〉》北海道立北方民族博物館蔵

最後に、フランスの華やかなモードを垣間見つつ展覧会は幕を閉じます。

パリには、高級服のメゾンの注文に応じて、図案や素材、刺し方などを提案し、具現化する専門の刺繍工房があります。その一つ、名門メゾン・ヴェルモンが所蔵するヴィンテージ刺繍と、刺繍サンブルを通して、創意工夫に満ちたオートクチュールの世界をお楽しみください。

約二三〇点の多彩な出品作を通して、素材の温かみや柔らかな質感、針で糸を縫い込んでいく力強さといった、刺繍が元来持つ魅力とともに、背景にある社会や歴史、文化にも思いをはせていただけたら幸いです。

(上席学芸員 貴家映子)

当館では、夏のこの時期、「文明展」と呼びならわしている大規模展示をたびたび開催してきました。元々、美術博物館として計画された当館で、「美術」だけではない、多様な文化や歴史に触れていたいただきたい」という思いから、続けられてきた催しです。

地道な手作業を基本に生み出される「刺繍」がテーマの本展は、古代文明の壮大な歴史や遺物などと比較すると、一見、地味に思われるかもしれませんが。しかし、国や時代を越えて発展してきたこの技法に焦点を当てることで、東欧から、カナダ、フランス、そして日本へと、空間的には大きな広が

2023年度収蔵品展 美術館の中の書くこと

2023年7月25日(火)～9月18日(月・祝)

近年、あちこちの広告で「エモ字」と呼ばれる手書き風の斜めに殴り書いたような文字をみかけます。「エモ字」とは「エモイ文字」の略語で、「エモイ」はエモーショナルが由来の若者言葉です。均一な書体デザインが生活のあらゆる場面で用いられる中、個性的に見える手書き風の文字の、人の心に訴えかける力が見直されているようです。

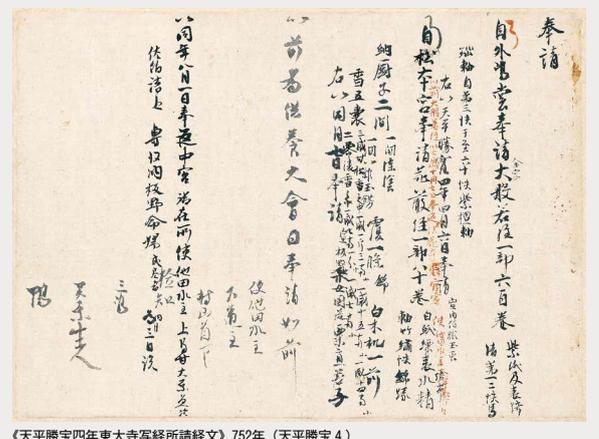
そうした手書きの、または手書き風の文字を見ているうちに、つい、手を動かしてその字を書く動きをトレースし、書き手を想像するという経験をお持ちの方もいるのではないのでしょうか。イタリアのカリグラファー、フラ

ンチエスカ・ピアゼットンは「手書きの文字は、紛れもなく身体性を前提とし、そして内包している」と指摘し、「筆跡は私的なもの、個人的なもの」で、「書いた人に「似る」「菅野有美訳『美しい痕跡 手書きへの賛歌』みすず書房、二〇二〇年」と言います。今風に形容すれば「エモイ」手書き文字がわたしたちの心に訴えかけてくるのは、書いた人の動きや個性が深く刻み込まれ、見る人はその人そのものを文字から感じるからなのでしょう。

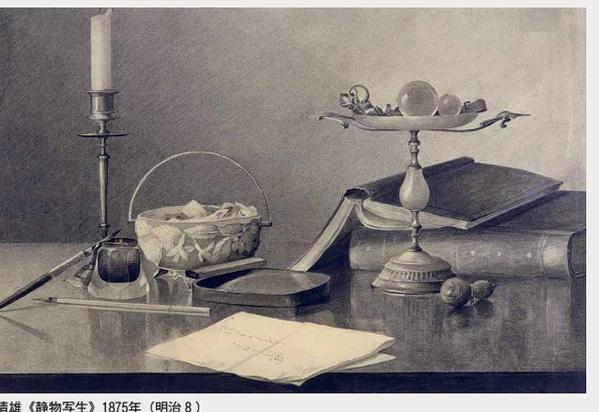
本誌読者にはおなじみのことですが、当館コレクション第一号は、重要文化財に指定されている「天平勝宝四年東大寺写経所請経文」（七五二年）でした。東大寺写経所による記録文書である本史料は、国学者小杉楳邨の旧蔵品になります。当館は構想当初、美術博物館として計画されており、こうした歴史的に重要な文献も収集対象とされてきました。当館コレクションは美術や書の範疇におさまりきらない手書きの文字がはじまりにあり、奥行き豊かな個性をかたちづくっています。

「美術館の中の書くこと」と題する本展は、楳邨の旧蔵品である小杉文庫に収められたさまざまな目的で書かれた手書き文字たちの紹介から始めます。その後、「明治の書画」、「川村清

雄の書くこと」、「絵の中の文字」、「曾



《天平勝宝四年東大寺写経所請経文》752年（天平勝宝4）



川村清雄《静物写生》1875年（明治8）

（主任学芸員 喜多孝臣）

つじかこう 都路華香 《松風村雨》 —能を描く—

学芸課長 石上充代

都路華香（一八七〇—一九三二）は、明治期の京都画壇を力強く牽引した幸野楳嶺の門下にあつて、四天王の一人に数えられる画家である。のちに京都市立絵画専門学校などの校長職も務めた。その経歴の割には、個性的な作風を開拓した異色の画家として取り上げられることが多かったが、近年、近代日本画の再検証が進むなかで華香の画業についても見直され、特に波の表現に見られる独自性と魅力については知られるようになってきている。ここで取り上げる《松風村雨》についても、伝統に依らない個性的な波の描写が現れ始める最初期の作例として

注目されている。ただ、本作の場合、これが能に由来する波景色であるという点において、華香の作品の中でも特殊なものといえる。その点に注意しながら、本作の特徴と、華香が表現しようとしたものについて考えていきたい。

本作が材を取る能『松風』は、秋の月夜の須磨の浦に、亡き在原行平を慕い続ける海人乙女の姉妹、松風と村雨の霊が現れる夢幻能である。屏風では右隻に松風村雨、左隻に須磨の海景を描いて組み合わせ、一雙とする。

姉妹は水衣をまとい、姉の松風と思われる手前の人物は汐汲車へとつながる朱色の紐を握る。二人の装いは能舞台において演者が身に着ける装束そのままであり、汐汲車も能で用いられる作り物の形を写している。このような松風村雨と汐汲車の描き方は、演能の舞台を描く能絵において『松風』を表す際の典型であり、本作もそうした図像に学んでいる。ただし二人の足元には岩が描かれており、ここが屋外であることが明示される。人物も面をつけてはいない。『松風』が演じられる舞台上の情景を描くようでありながら、そのストーリーを絵画化した物語絵のようでもあり、画面には異質なものが共存しているといえる。

左隻では、画面下三分の一ほどの高さに水平線を取り、海景を奥行き深く表現する。焼群青を主体として部分的に緑青を加え、リズムカルな筆致を繰り返して

つ一部には厚く絵具を重ねることで、絶え間なく揺れ動く波と、その下の海の深さを感じさせる。早くから四条派風の波の描写に長けていた華香であるが、特に明治末期から大正初期にかけては、波の描写に様々な工夫を凝らし、かつてない独自の表現を展開させていった。その入口に位置するのが本作であり、水の深さや重さを感じさせる写実的な描写は、華香にとつてかつてない挑戦であった。その清新な表現が本作の大きな魅力となっている。

さて、本作は、第十回新古今美術展覧会に、審査員の作として出品されたもので、竹内栖鳳、谷口香嶠による発表当時の作品評が残されている（註1）。栖鳳は、謡曲風の扮装があることで人物が優美になり、題の主旨を表すという点で高く評価する。香嶠は、月にちなむ謡曲の風情の不足や汐汲車と岩の不調和、左隻に磯がほしいといった構成上の不満などを述べるが、全体として色もよく品位がある、とする。

こののちの華香の歩みを知る後世の作品評では、もっぱら波の描写が注目される《松風村雨》だが、当時の評では「沖の浪はよい」と香嶠がひと言触れるだけであるのには意表を突かれる。当時の華香周辺の画家にとつて、本作の焦点は能をいかに絵画化するかという点にあったと考えられよう。これを踏まえて、両隻を改めて見ていきたい。



都路華香 松風村雨 明治38年（1905）絹本着色 各152.6×357.6cm 個人蔵





都路華香 松風村雨 右隻部分

右隻に描かれるのは松風村雨の姉妹であるが、ここでうら若い乙女の悲恋を表すだけでは、能本来の情感を表すことは難しかろう。能の世界の松風村雨は、須磨の浦に残る亡霊であり、人ならざるものになってまで行平を慕い続ける、そのことによって限らない哀切を感じさせる存在だからである。本屏風では、須磨の浜辺に姉妹を置きつつ、能装束をまとわせ、能舞台における松風村雨のイメージを呼び込むことで、その超俗的な存在感を表現したものと考えたい。能装束でありながら能面はつけず、露わになった二人の顔は、汐汲車に目を向けつつもどこか茫洋として、捉えどころのない儚さがある。物語絵のようであり、演能の一場

面のようにもあるという曖昧さは、海人乙女であり、また亡霊でもある、夢幻能の登場人物としての松風村雨の二重性が重ねられているかのようである。

一方左隻では、写実的な波の描写と広やかな空間表現にもとづく現実感豊かな海景が描かれる。と同時に、画面左手、海面が明るくなった部分は月光の反射を表しており、月下の須磨の浦で繰り広げられる『松風』の美しい詩情が託されていることが理解される。このうち、華香の波からは文学的な要素が取り除かれ(註2)、波そのものの色や形に着目したり、意匠化を進めたりと、さまざまな実験が行われていくが、本作では、写実的な波に能の世界の豊かな情感が重ねて表される点に、大きな特徴がある。左隻は、右隻とともに眺めることで能『松風』の須磨の浦へと転じ、現実感と象徴性との間を行きつ戻りつしながら堪能される、特別な波景色が立ち現れてくるのである。

『松風村雨』は、波の表現において華香の転換点となった作品であるが、少なくとも本作における到達点として華香が見据えていたのは、右隻・左隻それぞれに重層的な意味を持たせて膨らませながら、一双形式を巧みに用いて、能『松風』の清らかで哀れな抒情を表現することだったのではないだろうか。自然景の中に具体的なモチーフを置きつつも、全体として、『松風』に託された抽象的な世界

の表現を目指していたものと考えられる。

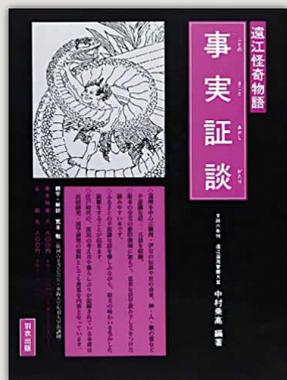
明治三十年代半ばまでの華香は、『大塔宮』、『李太白図』といった明晰な線と色彩による歴史人物画を多く手がけていたが、やがて人物画を離れ、波を中心とした自然景の研究に軸足を移していく。本作はその接点に現れた特殊な作品といえる。能の文学的な情緒をいかに表現するかという点に関心を寄せ、独特の創意を發揮したことが確認される作品であり、こののちの華香の歩みの主流とはならなかったものの、華香の画業における重要な一側面として理解したい。

註

1 「栖霞氏曰く、氏は果断に富むた人だけあって画が果断に出来て居る。学画編にも断決といふ事が一項に成っているくらいで、大作ものには必ずこの断決せざるべからざる場合に邁進するものである。今この姉妹を写すにあたって、謡曲風の扮装を借られた処は一つの断決である。行平が何処いかなるものの子であるかと不審がられし其容姿の賤しからざりし憐れに床しきこの姉妹は、この扮装に依りて優美なる面目を一層深からしめた。人はこの人物と天然の風景との不調和をいうも、自分は題の主旨を貫く上に於て、当然なる断決なりと服するものである。香崎氏曰く、松風村雨の姉妹が今少し桶の中の月を見ている意気込みが欲しい。月は一つ、影は二つ、みつ汐の、夜の車に月をのせてという風情がそれで汐汲車の傍に天然の岩石があるのは調和がわるい、あれはない方がよかる。沖の浪はよいが、こっちの半隻に磯が欲しい、さもないと別々に見える。髪あげる手は工夫を要し、姉妹の同じ赤の唐織は変えた方がよい。然し全体に色彩もよく、品位もあり、此前の豊太郎よりはずっとよい。」(雑録 松風 都路華香)

2 「畫林」九号、一九〇五年六月

森岡三千代「再検討・都路華香の画業と生涯」二九頁(近代の京都画壇 シアトル美術館からの里帰り)神戸新聞社 二〇〇一年)



本の窓

中村乗高編著
宮本勉 翻字・解説
事実証談
版本の影印、翻刻文、解説等を受録
平成五年(原著は文政六(一八三三年)成立)
羽衣出版

掛川藩の御抱絵師・村松弘(むらまつひろ)について調べている際に、その落款を持つ挿絵が掲載されることから出会った江戸時代後期の奇譚集です。遠州等で採録された、神霊・人霊にまつわる二百十五の不可思議な話を収めています。著者の中村乗高は、現在の森町に位置する天宮神社の神主で、国学者でもありました。神木の伐採や神域への穢れの持ち込み、怨霊・生霊による祟りが、病や死等の災厄をもたらすという捉え方には、当時の神道の論理が色濃く反映されていると考えられます。しかし、時に事件の関係者に直接話を聞くという入念な取材に基づく各話は、日時、地名、人名等が事細かに記され、あたかもルポルタージュを読ませるかのようになり、読者を怪奇の世界へと誘います。(主任学芸員 浦澤倫太郎)

美術館に来て知ったこと

副館長 和田誉雄

私は、若い頃、美術というものには全く興味が無く、主にアウトドア派でしたが、子育てがある程度一段落した時に、ある企画展の招待券をいただいたことをきっかけに美術館に足を運ぶことが多くなりました。今では何の企画展だったか忘れてしまいました。

この春、県立美術館に人事異動になり知ったことがあります。美術館の運営には、学芸員や運営・管理する職員、展示室の監視や設備等を担当するスタッフ、ボランティア



過去の展覧会のポスターが飾られている職員通路

IA、美術館友の会の皆さんなどで成り立っていることはある程度理解してしました。しかし、一〇人以上のボランティアの皆さんが多岐に渡って活動していることを知り驚きました。

ボランティアは、図書閲覧室の受付等を担当する「図書閲覧室」、学校等の団体の館内誘導等を担当する「学校」、観覧者を対象とした作品解説を担当する「ギャラリートゥアー」、視覚障害者が彫刻を触って鑑賞するための案内を担当する「タッチツアー」、実技室でのイベント補助を担当する「実技室」、DM整理とデータ化、ポスター、情報コーナーの整備を担当する「資料整理」、美術館周辺地域の散策や美術館の茶畑の保護管理など地域と美術館を結ぶ役割を担っている「地域連携・草薙ツアー」の七つのグループがあります。どのグループも一生懸命に活動されており、美術館を運営する上で、欠くことのできない皆さんとなっております。本当にありがたいと思います。

今年度も県立美術館では魅力ある展覧会を開催します。私は裏方として、美術館を支えていただいている多くの皆さんと連携して、県立美術館から芸術文化の発信に努めていきたいと思えます。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)
※7月10日(月)～24日(月)、9月19日(火)～10月16日(月)、12月11日(月)～2024年2月9日(金)は工事休館

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spsmoa.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
企画総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

「糸で描く物語 刺繍と、絵と、ファッションと。」 関連イベント

ちょこっと体験「みんなでちくちくアート」
8月5日(土)、6日(日)開催の「夏休み子どもワークショップ」に参加した子どもたちが制作したタペストリーを、来場者が刺しゅうの帯で枠どって完成させます。完成した作品は、会期終了まで展示します。ふるってご参加ください。
日時：8月11日(金)～14日(月)
10:00～12:00、13:00～15:30
会場：館内無料エリア 対象：どなたでも
※申込不要・参加無料/小学生以下は保護者同伴でお越し下さい。

静岡県立美術館 友の会

静岡県立美術館友の会は、「芸術を愛する人々が、会員相互の親睦を深め美術館の活動を後援し、芸術文化の普及を図っていく」という理念のもと、美術館の協力を得て活動しております。
この会は、講演会・講座などの主催や会報の発行・鑑賞会・研修旅行を実施しています。さらに美術館活動への協力・援助を通して、県民1人ひとりに愛され親しまれる美術館となるよう協力しています。
入会手続きの詳しいご案内は友の会事務局まで
〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
Tel・Fax 054-264-0867
Email tomonokai@spsmoa.shizuoka.shizuoka.jp
<https://www.kenbi-tomonokai.jp/>

- 特別会員 (1口) 10,000円
- 一般会員 (1名) 5,000円
- 親子(キッズ)会員 (1名) 3,000円
- シニア会員 (70歳以上 1名) 2,500円
- 学生会員 (高校、大学、専門学校 1名) 1,000円
- 賛助会員 (企業様向けとなります。お問い合わせください。)
- プレゼント会員

友の会の「会員証」をプレゼントしませんか? 「会員証」を友人や知人に進呈することができます! 詳しくは友の会事務局にお問い合わせください。

事業委員、会報委員募集中

友の会では各事業の計画、運営、会報誌『プロムナード』の編集と一緒にお手伝いして下さる方を募集しています。ぜひお気軽にご参加ください。